
ある喫茶店でのはなし～前編～

蒼色本屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある喫茶店ではなし〜前編〜

【Nコード】

N5587F

【作者名】

蒼色本屋

【あらすじ】

ある1人の小説家？の日常が1人の女子大生の出現によって面倒なことになる……

(前書き)

初投稿なので、多分駄作です。それでもいいって人はどうぞ読んでください。

毎週土曜日、昼時を過ぎた午後3時、オレはノートパソコンを持ってお気に入りの喫茶店『ネコの気まぐれ』に行く。

この喫茶店通いを既に2年以上も続けており、欠かせない日常になっていた。そのうち喫茶店のマスターとも仲良くなり、いつもオレが長居しても笑って受け入れてくれた。

そろそろ冬が近づいてきた季節のある土曜日に、オレはいつものように喫茶店に入る。

「……ああ、彰……来たか……」

「こんにちは。」

入るとすぐにマスターの姿が見えた。

言いそびれていたが、オレの名前は大島 彰【おおしま あきら】

……当然、男だ。

彼の顔がこちらに謝っているような印象があったが気にせず、軽くあいさつをして店の奥に目をやると、オレがいつも座っているテーブルに女の子……というか、先客がいた。

「……マスター……あの子は？」

見たところ、どうやら長居している客ではないようだ。

ここは相変わらず小さい店だが、だいたい半年位前からマスターはオレのお気に入りでもある、店の奥にある席を開けておいてくれるようになった。今日は比較的空いていて、空席もあるにはあるのだが、あの席は取れなかったようだ。

しかし、マスターが席を開け損ねたのは初めてだ。

「……実はな、10分位前に来てあそこに座ったから、そこは予約席だからダメだって言ったら、うまく言いくるめられて、さらに金を出されてなあ。」

……なるほど。買収されたのか。道理でさっきの顔が少しだけ楽しそうだったかが分かったよ……

「……今日は別の席に座りますよ。」

そう言って他の空席に座ろうとするが、マスターに呼び止められた。

「まあ待て……彼女は相席の要求をしてきたんだ。……そのうち帰るだろうから、あの席に座ってくれんか？」

「……分かりました。」

珍しい事もあるものだ。好んで相席を頼む人なんて初めて見た。しかしオレはそれを受け入れ、お気に入り席の席に向かう。

マスターには普段からお世話になっているのだ。それに断る理由もない。たまには恩返しもせねば。

席に近付くにつれ、どんな子が座っているのかが分かる。

長い黒髪の、オレよりだいぶ小さい女の子。イスにちょこんと座っているその姿は、まるでだれかを待っている……そんな感じだった。

……まあ、待たれているのはオレのようだが。

「……こんにちは……」

「……」

隣りに立ってとりあえず声を掛けるが、返事がない………といふか寝ていた。小さく見えたのは背中が曲がっていたせいだろう。仕方なく向かいの席に座って持ってきたパソコンを開き、その少女が起きるのを待つことにした。

何となく少女の顔に目をやると、思わず見とれてしまった。

一言で表すなら、美人。しかも、少し幼げな寝顔がかなりかわいい。

雪のような白い肌と、テーブルに乗っていたメガネと1冊の本から、インドア派だろうと予測された。

……少し動いたので、そろそろ起きるだろう。

「……………ん……………あれ？」

「……………やっと起きたか。」

女の子はオレが思っていたより早く起きた。だが目の前の人物……つまりオレを見て目を白黒させていた。

「……………あなた、誰ですか？」

……………いきなりそれかよ。

「……………オレがこの席を予約していた客だよ。」

「……………そうなんですか！？」

「そうなんですか……………って、なんで驚いているんだ？」

「……………だ…だって……………」

何かなんだか分からないという顔をした少女は近くのカバンから何かを取り出し、テーブルの上に置く。

……………出てきたモノは、1冊の本。大ヒットには程遠いが、それなりに人気が出ていて、特に女の子達に人気がある、『ホワイトキヤット』という人が書いた、どこにでもあるような恋愛小説だった。……………何より、オレはこの本を誰よりもよく知っていた。

「……………この本の作者さん……………ですか？」

……………オレが書いた初めての作品だからだ。

「……………人って、見かけによらないねえ。」

「……………さり気なくバカにしてないか？」

この少女はどうやらあの本の大ファンで、作者とお話したくなっただろう。意外にも彼女は言葉にトゲがあり、第一印象の儚さはどこか散っていった。しかも、口調まで崩れてるし……………

確かにオレは髪が短くて、身長もあって、スポーツ出来そうな体型で、まさにアウトドア派まっしぐらな外見で、本なんか絶対に書かなさそうに見えるだろうが……それを言葉にしないで欲しかったなあ…………

……だが、それ以前にどーしても気になることがあった。

「1つ聞くぞ……どーしてオレがこの時間に、ここに来ることを知っていた？」

オレのような常連客は、会話することもないので他人でも『外見』で分かる。

だが、オレは自分のペンネームが『ホワイトキャット』であることを友達にも伝えていないのだ。当然、顔も表に出していない。この少女がいい例だ。

知っているのは3、4人の親友くらいで、誰もが口の堅いヤツらだ。

だから知られることがあるはずがない。あつてはならないのだ。

「……前こころ来たときに大声で話していたわよ？ マスターが。」

.....

マ、マスタアア！！！！！！

あんたかよ!!……けっこう信じてたのに……

「……スマン！つい旧友と酒を飲んではいでたら、お前のこと話してちまって……だ、けどな？それは客がいないの確認してから飲んだはずだったんだが……その……このお嬢ちゃんに気付かなかったんだな、あははっ！！」

自然と近寄って来たマスターが弁解をしてきた。……だがな……笑
ってごまかしたって、そうはいかねえぜ……………

「……マスター、明日だっけ？奥さんが帰って来るのは？」

瞬時にマスターの顔が引きつる。

「……………そ、それだけはカ、カンベン！この前だって……やばかったんだぞ！？」

マスターの奥さんは現在、友人と旅行中だとか。普段の周りに対

する態度は金賞モノだが、キレてしまうと手が付けられない。一度見たことがあったが、あれはすごかった……

加えて、オレの小説のファンでもあり、オレが小説を書くのを楽しみにしている。……もし、マスターのせいでオレが小説を書かなくなってしまったら、おそらく彼女は、マスターに………

いや……これ以上は考えないでおこう。

「……今度からは気をつけて下さいよ。……ホラ、お客さんが呼んでます。」

マスターは心から（であろう）礼を言って、仕事に戻っていった。「……私のこと、忘れてない？」

少女に目をやると、なんだか啞然としているように見えた。オレとマスターのやりとりで驚いただろうが、聞きたいことはまだある。

「……他のヤツに話したか？」

もしバラされていたら、毎週土曜日にはこの店が儲るだろう。弊害としてここには来れなくなるが、今のところ大丈夫。

「話してないわよ……だって勿体無かったんだもん。」

……なるほど。過去形ってのは気になるが、今のところ大丈夫なようだ。

次にマスターが話した時、この子以外に客は……

「それに、さっきのマスターのだって、店内にいたのは本当に私だけだし。」

……勝手に喋ってくれたよ。だが、それなら安心出来る。………

……よし……後は、この少女だけだ。

「……キミに頼みたい事があるんだが……」

「あなたのことをバラさないで欲しい………とか？」

得意顔で話してきた。……カンが鋭いな。

「まあ、そういうことだ。こっちはあんまり顔を知られたくないし、読者だって、こんなヤツがコレ書いてるの知ったらかわいそうだろう？」

「……そうね……こんなヤツが書いてたなんて知ったら、読者が

かわいいそすぎるわ……………」

……………オレの言葉を理解してくれたのはいいんだが、やっぱりバカにされてるよな？

「……………でも、今日は私とお話、してもらおうよ？」

少女がニヤリと笑った。

……………仕方ない。この少女だってそれが目的で来たのだ。それもさせないのは正直かわいいそうだな。

「……………いいぞ。」

オレは了承したのだが、これがいけなかったのかもしれない……………

話していく内に段々と少女のことが分かってきた。

名前は桐原 真澄【きりはら ますみ】。

近くの大学の2年生らしく、体格が小さく、童顔だから信じられないって言ったらふてくされた。

趣味は意外にもウィンドウショッピング。……………ほんとに意外だな……………

最近、友達から勧められたのがきっかけで本を読み始めたらしく、今では本が大好きだとか。

「……………それで、何してんの？」

彼女はオレがパソコンをいじってるのが気になったようで、テーブル越しに画面をのぞきこんでくる。

こら、顔がニヤついて……………笑いが黒いぞ？

画面を見た途端、動きが止まった。しばらくして復活したら、画面を指差してこっちを向く。

「……………なにこれ？」

……………ん？執筆しているとも思っただろうか？

「……………見て分かんないか？株取引だ。」

この喫茶店には、珍しく無線LANが付いている。

家だと、どうしても通信料が掛かるからな。ここなら気にせず使

えるってことだ。マスターだって、『使い放題』って言ってたし。

「ふーん……………次の本を書いていると思ったんだけどな。」

……………予想、当たってたよ。ここは否定せねば。

「ここには気分転換で来てるんだ。そんなことするためじゃない。」
オレは注文したコーヒーを飲んで一息つく。……………うん。やっぱりここのはうまい。

「じゃあ、家で書いてるんだ。」

「まあそうだが、それ以前にモノ書きは本業じゃない。」

「……………そうなの？」

なぜに疑問形？ もしや……………

「……………なあ、あんたはオレが何才だと思ってんだ？」

「……………んと、22才？」

……………やっぱりな……………

「……………オレは17才。高校2年だ。」

途端に彼女の顔が引きつる。

……………うん……………分かるよ……………

「……………わ……………私より年下なの!？」

そう感じちまうのは。今までほとんどのヤツらに実年齢より上だ
って見られてたからな……………もう慣れたよ。クソ……………

「事実だ。そんでみんなからあんたと同じ反応を返された。」

「じ、じゃあ、どうやって本なんか出したのよ!？」

……………なんだ？ そんなことが気になるのか。

「出版するときに1回だけ業者が来たけどな、若いって言われて問
題無かった。」

……………年齢詐称したし。

「……………それに、あの本はこのマスターたちが勝手に出版したんだ。」

そう……………だいたい7ヶ月くらい前に、ヒマだからパソコンで作っ
ていた文書入れっ放しで、そのパソコンごと店に忘れて、マスター
とその奥さんがそれを読みまして……………

後は勝手に話が進んで、製作費は奥さんが出して、出版されたら、なんか人気が出て……

初めは『なんじゃそりゃ!』って叫びたかったけど、なんかあの2人が笑ってるのを見たら、まあいいかって気になって……

「……あんだ、著作権は?」

「このコーヒー代と交換……一生タダにしてもらった。」
うまいし。出版したのマスターたちだし。

「はあ……あんだ、バカね! 印税でもっと金が稼げたのに!!」
ほう。言ってくれるな……確かにそうなんだが。

「……世の中は金で動いてるが、オレはこの人にかなりお世話になったんだ。ほんとなら、コーヒーの権利なんて受け取れない位にな。」

オレのペンネームを使ってるんだから、全然問題もないし。

「さらに言えば、オレは株で儲ってんだ……これ以上金の心配がない位にな。」

家は持ち家だし、銀行の預金保証制度なんて、あと1桁は欲しい位だ。しかも、いま話しているうちにも2万は稼いだし。

「ふーん。随分と贅沢なヤツなのね。」

……ジト目で見たって何にもやらんぞ。

「……それはともかく、私のこと、キミとかおまえとかで呼ばないでくれる!？」

なんだ? 不思議なことを要求してくるヤツだな。

「……? じゃあ、なんて呼べばいいんだ?」

すると彼女は少し恥ずかしそうな顔をしてしまった……なぜだ?

「……ま、真澄って呼んでよ! せっかく名前があるんだから!」
おいおい、声は小さくな。店中の客に怪しまれる。まあ、そう呼んでやるか。

「分かったよ、真澄……それと、オレのことも彰って呼んでくれ。そっちの方が聞き慣れてる。」

「……わかった……そういえば！彰くんに聞きたいことがたくさんあったからここに来たのよ！……ちゃんと質問に答えてね！！」

こうして、オレたちは出会ってしまったのだ。

……この元気すぎる女の子……もとい女性、桐原 真澄がオレを静かな暮らしから引っ張り出してしまう………そんな気がした。
………はあ………これからどうなるんだろ？バレなきゃいいんだけどねえ………

（後書き）

事情によって、後編の投稿はかなり後になると思います。投稿できなときは、また読んでもらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587f/>

ある喫茶店でのはなし～前編～

2010年10月8日15時21分発行